〔PBLの風と土 第15回〕 所属の獲得と相互承認による学びと成長 山口洋典 (立命館大学共通教育推進機構教授)

## 【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学(AAU)で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開 学当初から全学でPBL(Problem-Based Learning)を導入していることで知られています。

連載1回目から4回目までは現地報告、第5回から8回目まではアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外の問題解決学習の知見(5回目:AAUの実践の特徴、6回目:学習プロセス、7回目:問題設定、8回目:指導法)を紐解きました。9回目からはサービス・ラーニングとの比較を重ねてきています。

# 1. 現在と過去の対話で未来を構想する

前回も記したとおり、コロナ禍により、2020年8月16日から21日にかけて、デンマークのオールボー大学で開催される予定であった「AALBORG PBL WEEK」は1年間の延期となった。「AALBORG PBL WEEK」の前半はUNESCOのユニツイン(UNITWIN: University Twinning)/ユネスコチェア(UNESCO Chairs)プログラムに基づく「International Research Sympo-

/ユネスコチェア (UNESCO Chairs) プログラ ムに基づく「International Research Symposium on PBL (IRSPBL) | PBL国際研究シンポジ ウム)であり、後半はPBLに関する国際学会の1つ PAN-PBL (Association of Problem-Based Learning and Active Learning Methodologies)の学術大会(基本的には隔年開催)をオー ルボー大学が誘致したものである。1年間の延期 にあたり、後者のテーマは当初と同じく「Transforming PBL: Through Hybrid Learning Models」であるが、副題として「Timely Challenges and Answers in a (Post-)Pandemic Perspective and Beyond」と付された。1一方で前者のシンポ ジウムには特段の副題は付されてはいないもの の、2021年8月に向けて「Moving towards a Virtual PBL Community」と掲げた「Flipped IRSPBL 2020/2021] というウェビナーシリーズ が展開されることが、前回紹介した2020年8月 18日の「AALBORG PBL WEEK」キックオフセ ミナーで発表された。

11月25日、その1回目のウェビナー「Moving Towards a Virtual PBL Community」が開催され、筆者も参加した。1時間ずつ2つのセッショ

ン(合計4つ)が設けられ、筆者は「Democracy, Social Progress and PBL」と「Varity and Understanding of Problems and Projects」に参加した。前半はスウェーデン王立工科大学の事例、後半ではオールボー大学とKLE工科大学(インド)とドレスデン工科大学(ドイツ)の事例が発表された。3大学なお、前半のセッションは6名、後半のものは17名と、国際会議のプレイベントとして捉えると決して大人数ではない。しかし、チャットや発話の随意の方法で参加者どうしが積極的に意見交換して各地の実践を紐解く場に浸ることで、オールボーで過ごした2017年の1年間のいくつかの場面を想い起こした。

「歴史は現在と過去の対話である」 (Carr, 1961=1962訳, p.iii) という言葉のとおり、筆者が デンマークで過ごした時間があってこそ、こうして PBLの意義を問い、また現在の職務であるサービ ス・ラーニング手法を用いた学びと成長を促してい く上での未来を構想することができている。2その 一方で、コロナ禍は「する/しない」という行為の 選択ではなく「できる/できない」という状況の判 断が各々に求められるため、他者の判断によって自 らの行為に制限がもたらされる場合には不満感が、 また自らの判断によって他者の行為に制限をもたら す場合には不全感が、それぞれに生じる。結果とし て、徒労感や無力感、さらには物事や出来事に対し て無気力になっていくという悪循環さえ導きかねな い。ただ、冒頭で紹介したウェビナーのように、規 模の大小にかかわらず現状に即して新たな挑戦を重 ねた経験を共有し、非日常が日常化しつつある中で

コロナ禍の収束・終息後の世界を愚直に探索している場も無数に存在する。

そこで今回は、前回の結語でも記したとおり、コ ロナ禍以前に地域参加型学習のプログラムで足を運 んだ地に移り住んだ人々が、いかにして未来を拓く 新しい当事者になっているか、その学びと成長の径 路を辿ってみたい。具体的には、立命館大学教養C 群「シチズンシップ・スタディーズI」の「減災× 学びプロジェクトーの過年度の受講生が、福島県楢 葉町を主なフィールドにどのような仕事と暮らしを 送っているかについて取り上げていく。前回の連載 でも簡単に紹介したところであるが、福島県楢葉町 は、東京電力福島第一原子力発電所から20km圏の ほぼ南限にあたり、放射線という目には見えないも のがもたらす被害との奮闘を余儀なくされてきた。 新型コロナウイルスもまた、目には見えない存在で ある、という共通点から現象学的に人々の振る舞い を比較することも、筆者が専門とする社会心理学の 一分野であるグループ・ダイナミックスの観点から は大いに興味があるところであるが、本連載の主旨 のもと、問題解決型の参加型学習のインパクトに主 要な関心を置くこととする。

# 2.4様ながら共に時と場を過ごした4者

質的研究における研究倫理という観点のみならず、人の仕事や暮らしを紹介するにあたっては細心の注意が必要である。その点、前回の連載から取り上げている「減災×学びプロジェクト」及び「そよ風届け隊」に関わってきた学生は、既に公刊されている媒体が多数あるため、それらを積極的に活用し、地域参加型学習を通じた各々の学びと成長について検討していく。通常、こうした学

びと成長については、例えば山口・河井 (2016)でのまとめのとおり、履修中のアンケート調査や成績評価に際して提出されたレポートなどをもとに、学習内容や活動内容を形成的・総括的が評価される。しかし、今回取り上げる4人は、2020年度が東日本大震災発災から10年を迎えることもあって、9月1日から東京新聞において10回の連載(紙面・インターネット双方、インターネットは無償で全文公開)で紹介され、さらに連載記事の公刊後には立命館災害復興支援室による「チャレンジ、ふくしま塾」で行われた対話が立命館大学のOB・OG組織「校友会」の年次大会のオンデマンド(動画)配信企画として公開されたため、それらを中心に用いて、4人の学びと成長の軌跡を整理していく。3

2020年9月1日から10回連続で掲載された東京新聞の連載の概要を表1にまとめた。表中の第10回に筆者の名前もあることからもわかるように、何より前回の連載でも筆者の減災×学びプロジェクトや「そよ風届け隊」の関わりについて述べてきたように、筆者は今回取り上げる4人(以下は実名で紹介、文中敬称略)と在学中から一定の関わり合いを重ねてきている。ちなみにこの連載に際し、筆者は連載第1回の冒頭で登場する鈴木みなみから連載を担当する坂本充孝編集委員に紹介され、電話取材にて対応したものが収められた。また、筆者以外の4名は坂本編集委員が現地に足を運び、取材したものがまとめられている。

そこで、東京新聞の連載と、オール立命館校友 大会2020の映像をもとに、4人のプロフィールを 以下のとおりに作成した。順番は上掲の映像の紹 介ページで示されているゲスト紹介の順とした。

表1:東京新聞連載「ふくしまの10年」(https://www.tokyo-np.co.jp/tags/fukushima10/) シリーズ「新天地にそよぐ風」(2020年9月1日~9月12日に掲載)の展開内容

	掲載	タイトル	概要	文中での紹介
1	9/1	学生ボランティアが原点	卒業後福島に住み復興に力を注ぎ続け	鈴木みなみ・森亮太・西崎芽衣
2	9/2	高齢者ばかり残されて	被災された方と次第に打ち解け	鈴木みなみ
3	9/3	被災者と市民語り合う場	語り合える場「未来会議」に関わって	森亮太・鈴木みなみ・西崎芽衣
4	9/4	溝埋まり 温かい暮らし	「ならはみらい」で働いた後に結婚	西崎芽衣
5	9/5	復興の一助に 充実の日々	地元の銀行に就職後「ならはみらい」に	森雄一朗
6	9/8	町の空気が動き始めた	「とみおかプラス」で富岡町のPRを	鈴木みなみ
7	9/9	「芸術家村」を作れたら	デザイナーで地域おこし協力隊に登録	森亮太
8	9/10	帰還町民が集う夢の城	「みんなの交流館 ならはCANvas」が拠点	西崎芽衣・森雄一朗
9	9/11	自分で生み出す達成感	双葉郡6町2村の連携で縦断ツアーを	森雄一朗
10	9/12	現地に根付く若者たち	減災からの学びが「そよ風届け隊」に	山口洋典

また、一部の情報はインターネットで公開されている情報も盛り込んだことを付記しておく。以下の内容から、まず、各自の現場への姿勢について大まかに捉え、その上で、相互の交流や、現場の方々との関係構築について想像力を巡らせていただければ幸甚である。4

## 森亮太(もり・りょうた)

1992年、岐阜県岐阜市出身。2009年、立命館大 学理工学部機械工学科入学。東日本大震災発災 時は京都で迎える。在学中はバックパッカーと して東南アジアやインドなど世界を旅する。 2012年2月から3月にインドに滞在した際、「日 本は大丈夫なのか」と尋ねられても答えられな い無知さに気づき、4回生の時に全学教養科目 の1つ「減災×学びプロジェクト」を受講。5月 に新潟県中越地震で大きな被害を受けた小千谷 市塩谷集落での田植え交流、6月に宮城県仙台 市の視察の後に岩手県宮古市で海岸清掃や仮設 住宅の集会所での交流などのボランティア活動 後、7月にNPO法人京都災害ボランティアネッ トによる「第三次にっしん隊」(会津藩校とし て白虎隊の学び舎となった「日新館」に由来) に参加。福島市・郡山市に避難していた富岡町 の皆さんの福島県天栄村での保養の際に足湯を 通じて、被災3県と言われるものの、岩手・宮 城に対し福島の深刻さを実感。9月にその体験 を仲間たちと共有し、大学の枠を越えて関西と 福島をつなぐサークルの設立を構想、10月に具 体化。2012年12月19日にメンバーの顔合わせを し「福島の方々に、そよ風のようにあたたかく 心地よい時間を届けたい」想いから「そよ風届 け隊」と命名、初代代表となる。2017年3月の 卒業後、楢葉町の宿泊温泉施設の職員に。契約 期間満了後、2018年4月にフリーのグラフィッ クデザイナーとして独立起業し、NPO法人 TATAKIAGE Japanでインターンの受入やへキ レキ舎で交流イベントを担当。作品の1つにな らはみらいの拠点「みんなの交流館 ならは CANvas」のロゴ。2019年には楢葉町起業型地 域おこし協力隊員に。

## 鈴木 みなみ(すずき・みなみ)

1990年、山形県真室川町出身。2011年、立命館大学産業社会学部現代社会学科人間福祉専攻入

学。入学の直前、山形県立米沢女子短期大学の 卒業を控えた際に東日本大震災が発生。家の近 所にあった体育館に隣接する宮城県や避難した 方々の支援のため足を運ぶものの、自分の無知 で相手を傷つけてしまうことにならないか、悩 みを抱える。入学後、立命館大学震災支援活動 情報ネットワーク(311+Rnet)に事務局メンバー として参画した後、2011年末から立命館災害復 興支援室が展開した後方支援プログラムに参加 して岩手県宮古市に複数回訪れ、現地の方々と 交流を重ねる。その後、宮古市での活動を共に した仲間の呼びかけに応え、「そよ風届け隊」 の設立から参加。2013年2月の初回の活動に参 加した際に住民と避難者とのあいだでの軋轢に 触れる。その後、2013年9月から大学を1年間休 学し、フクシマ環境未来基地でのインターンで 仮設住宅等での傾聴活動や、いわきで設立され た多様な価値観を尊重した対話の場づくりに取 り組む未来会議の活動に参加。復学の後、2016 年3月卒業。卒業後はいわきに移住し、双葉郡 未来会議の事務局スタッフとなった後、2017年 設立の一般社団法人とみおかプラスの事務局ス タッフに。平行して2018年、いわき・双葉の子 育て応援コミュニティcotohanaを立ち上げ、共 同代表となる。

# 西﨑 芽衣(にしざき・めい)

1992年、東京都八王子市出身。2012年、立命館 大学産業社会学部現代社会学科メディア社会専 攻入学。東日本大震災の当時は高校3年生で、 第一志望校の受験前日に発災。結果として「国 公立の大学に進学し、大きな会社に入れば幸せ になれる」という教えに反して、京都の私立大 学に。1回生で受講した大規模講義「地域参加 学習入門」で追加募集が呼びかけられた全学教 養科目「減災×学びプロジェクト」に参加し、 神戸市・新潟県小千谷市・岩手県宮古市でサー ビス・ラーニングを行う。夏休みを前に、当初 の授業計画にはなかった福島県での活動が紹介 され、興味を抱くものの、不参加。その後、現 地に行った3名の受講生からの報告に改めて関 心を向け、「そよ風届け隊」の設立に参加。 NPO法人京都災害ボランティアネットによる 「第三次にっしん隊」の活動に参加していた福

島大学・いわき明星大学の聞き取りをもとに、 2013年2月には、いわき市小名浜地区復興支援 ボランティアセンター(NPO法人ザ・ピープ ル)の協力のもとで足湯活動を、いわき明星大 学の学生と楢葉町から避難されてきた学童ボラ ンティアや傾聴活動に取り組む。その後も現地 を訪れ、楢葉町の方々と交流し、京都に帰って からも文通を重ねる中、町長による「帰町の判 断」(2014年5月29)に対し「楢葉町に戻るの ではなくいわき市に住むことを決めた」と綴ら れた文面にショックを受ける。ふるさとへの思 いがあっても戻ることができない人の「想いに 寄り添いたい」と、大学を休学。2015年4月か ら1年の任期で一般社団法人ならはみらいの嘱 託職員に。在任中には2015年9月5日の避難指示 解除に関わる各種企画運営業務への従事の他、 東京2020エンブレム委員会の委員に就任する。 復学後は神戸市長田区真野地区のまちづくりを テーマに卒業研究を行い、東京に本社のある企 業から就職内定を得るものの、後にならはみら いへの入社を選択。2017年3月の卒業後、「み んなの交流館 ならはCANvas」の運営に携わり ながら、まちの変化を見つめる。

#### 森 雄一朗(もり・ゆういちろう)

1995年、群馬県大泉町出身。2014年、立命館大 学法学部法学科国際法務特修入学。2015年、2 回生で「減災×学びプロジェクト」を受講し、 8月31日から9月6日にかけて、ならはみらいが 受入機関となって行われた楢葉町の避難指示解 除に際して町民31人の語りを文字に綴りポス ターにまとめる活動「ならは31人の"生"の物 語」に参加。プロジェクト終了後には受講生ら に呼びかけて、議員インターンシップを通じて 得たネットワークを活かし、関西電力の発電所 見学を企画コーディネートする。また、神戸・ 新潟・東北と各地を訪問した中でも楢葉町の 「豊かな自然やそこで暮らす人の魅力に引き込 まれ」、そよ風届け隊に参加、2016年4月には 代表に就く。その後、平成28年度楢葉町心の復 興事業の採択を受け、そよ風届け隊が呼びかけ て結成した「楢葉町かわら版制作委員会」設立 メンバーとなり、「人を結び、地域を結び、想 いを結ぶ」をスローガンに楢葉町民、楢葉出身

の学生、町外の学生と様々な視点から楢葉町を見つめ、ひと・もの・ことを伝えるフリーペーパーの発行に携わる。平行して、2016年8月には「遊びや勉強を通して、楢葉町で思い出を作ってもらいたい」と、楢葉町と楢葉町教育委員会の後援のもと、立命館大学生らによる中学生を対象にした学習支援団体Apolonとの連携で「めちゃめちゃよくばりキャンプ」を運営。2018年3月の卒業後、地元の銀行に就職するも、7月30日に開館の「みんなの交流館ならはCANvas」を契機にコンパクトタウン「笑ふるタウンならは」の展開が本格化することに関心を向け、半年で辞職し、ならはみらいに転職。町内外のネットワークの構築・推進に従事する。

# 3. 所属を有することで高まる相互承認

こうしてまとめたプロフィールをもとに、4人お よび筆者の現場への関わりを整理すると、表2のと おりになる。まず、4人は「減災×学びプロジェク ト」の受講生(2012年度:西崎芽衣・森亮太、 2015年度:森雄一朗)か否か、「そよ風届け隊」 の創設メンバー(鈴木みなみ・西崎芽衣・森亮太) か否か、に分けることができるものの、4人とも 「そよ風届け隊」のメンバーであったという共通 点がある。5さらに言えば、「そよ風届け隊」の設 立に参画していった3人は、立命館災害復興支援室 による後方支援スタッフ派遣プログラムで宮古市 を活動先とする便(鈴木みなみ:4・5・10・18、 森亮太:9・19・20・33、西崎芽衣:9) に参加 している。6また、前回の連載でも示したとおり、 減災Pでは復興プロセスの違いを比較するために過 去の大規模災害で被害を受けた地域でのボラン ティア活動を組み込んでいることから、2004年10 月23日の新潟県小千谷市塩谷集落への継続的な関 わりの有無にも自ずと違いが出ている。

そして、現地へと軸足が置かれていく中でのパターンを見出すことができよう。具体的には、まずは自力で現地に行くのではなく、何らかのプログラムで参加すること、である。そして、そうしたプログラムへの参加が、単にパッケージツアーへの参加と異なり、フィードバックがなされる場、あるいはフィードバックをする場があるということである。具体的には、現地に駆けつける上で、森亮太・西崎芽衣・森雄一朗は減災×学びプロジェ

表2·	「新天地にそよく	〜国 ー	登場人物の年別関係変化
122 .	利人心にしてめ、	ヽエい	立物八ツツ十川内川久し

_		1717	٠ .		. ,			- ' '	331-31-	
		2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
-	減災P	山口 森(亮) 鈴木 西崎	山口 西崎	Ш□	山口 森(雄)	山口 森(雄)		Ш□	Ш□	Ш□
	小干谷 塩谷集落	山口 森(亮) 西崎	山口 森(亮) 西崎	山口 森(亮) 西崎	山口 森(亮) 西崎 森(雄)	山口 森(亮) 西崎	山口 森(亮) 西崎	山口 森(亮) 西崎	ШΟ	Ш□
	宮古	森(亮) 鈴木 西崎 山口	森(亮) 山口	ШΟ	森(亮) 山口					
	そよ風 届け隊	森(亮) 鈴木 西崎 山口	森(亮) 鈴木 西崎 山口	森(亮) 鈴木 西崎 山口	森(克) 山口	森(雄) 森(亮) 西崎 山口	森(雄)			
	ならは みらい				西崎		西崎	西崎 森(雄)	西崎 森(雄)	西崎 森(雄)
	未来 会議 (いわき)		森(亮) 鈴木 西崎	森(亮) 鈴木 西崎	森(亮) 鈴木 西崎	森(亮) 鈴木 西崎	森(亮) 鈴木 西崎	森(亮) 鈴木 西崎 森(雄)	森(亮) 鈴木 西崎 森(雄)	森(完) 鈴木 西崎 森(雄)
	未来 会議 (双葉郡)				鈴木西崎	鈴木西崎	鈴木西崎	鈴木 西崎 森(雄)	鈴木 西崎 森(雄)	鈴木 西崎 森(雄)

クト(正課科目)で、鈴木みなみは311+Rnet (正課外・正課併行型活動)という所属を持ち、その経験をメンバーどうしで共有すると共に、同じ現場(例えば、岩手県宮古市)で出会った際に、所属の違いを超えて原所属(立命館大学)というつながりが新たな活動への発露となっている。加えて、それらのつながりは、ゼミ活動と異なり、同じ学部の同じ学年という同質性をもとにした連帯感や一体感ではなく、むしろ遠隔地から共に駆けつけていく上で、通常は縦割りされ分断をもたらしかねない異質性が無問題化されたものと捉えられるだろう。

復興支援活動のみならず、サービス・ラーニン グなど、地域参加型学習の現場に継続的に関わる ことによる学びと成長の結実が現地に居住するこ とによってのみ見出されるものではない。一方 で、何らかのプログラムを通じて現地に関わった 後、サークルに加入するかしないかにかかわら ず、予め手配されていた日程以外で自らチケット 等を手配して現地に赴くことは、その後の現地に 行き続けていく選択肢を生むことになる。それは 現地の方々にとっては引率者不在での現地訪問の ために直接的な関係構築の機会になると共に、同 行者がいればその道中での対話等を通じた共通の 記憶により、互いの存在や役割が承認される機会 となるためである。その結果、現場で匿名性のあ る1大学生の関わりではなく、名前で呼び合う関係 への醸成がもたらされる。

加えて、今回の4名は全員が内容・期間等が予め パッケージ化されたプログラムに参加した後に サークルに加入し、現地に頻繁に通っていった が、それに加えて在学中からメディア等の取材を 受け、自らの体験を積極的に言語化する機会を有 していたという共通点がある。筆者の実体験を重 ねてみれば、取材を受ける中では、自らの思いに言葉が追いつかない、またメディア等が伝えたい思いが先行もしくは取材者の意図に沿って換言されるなど、当人にとって不本意な経験を重ねた機会も何度かあっただろう。それでも現地への思いと行動が駆り立てられたのは、連載第10回で紹介したミネソタ大学のアンドリュー・フルコ(Andrew Furco)先生による「地域貢献・市民参画の水準」の整理に基づけば「for」あるいは「with」の前置詞の水準、つまり現場にて他者との関係性が重視・発展されていったからではなかろうか。

# 4. 関係性の進化と深化をもたらす触媒

今回は前回に続き東日本大震災の復興支援活動 に従事した大学生の学びと成長について取り上 げ、具体的には卒業後に福島県の沿岸部に住んで いる4人の人生径路を整理した。これらを本連載 の第13回で紹介したTEA(複線径路・等至性アプ ローチ) の理論(安田・サトウ, 2012・2017) に基づき図解(TEM: Trajectory Equifinality Modeling) したものが図1である。そして、現地 に行きたいと思った学生がプログラムを展開する プロジェクトに所属した後に実際にプログラムに 参加した後の流れとして、仲間と出会い、感想や 疑問を共有し合った仲間と新たな団体の結成もし くは既存の団体への参加をするか否か、そして大 学生であれば自ずと通過しなければならない卒業 というライフイベントを前にどこで仕事を見つけ るか、といった流れを整理したところ、大きく4 つの類型を見出すことができた。それらに対し て、学生時代に集団で活動し卒業後に現地に居住 する者をパートナー(協力者)、集団で活動した 後に卒業後は他地域に居住しつつも現地を訪れる 者をファン(支持者)、特に集団には属さないも のの卒業後に現地に居住する者をハビタント(居 住者)、特に集団には属さないものの現地を訪れ る者をサポーター(支援者)として位置づけた。

TEM図の作成は、実際に採った径路(図では実線)に対し、採らなかったものの論理上採り得た径路(図では点線)を明らかにする。また、実際に採り得た径路への阻害要因(Social Direction)や促進要因(Social Guidance)を検討する契機ともなる。今回、4人のプロフィールを作成し、そこからTEM図を検討していくにあたり、

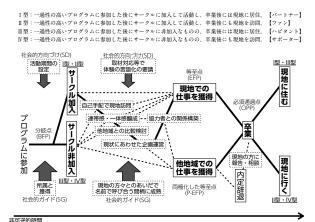


図1:プログラム参加学生が卒業後も現地に関わるプロセス各々が現地の方々と関係性を醸成する上で、意図的あるいは結果的に用いたツールの存在に着目してみた。別の言い方をすれば、関係構築の触媒は何か、ということである。

今回取り上げた4人が必ずしも同じ水準や意図で活用していないとしても、各々が比較的共通して用いてきたものが手紙である。実際、そよ風届け隊の活動において定期的に仮設住宅を訪れて足湯を提供した後「今度はいつ来てくれるの?」という手紙が福島から届いたことが、立命館大学が作成した広報物にて紹介されている。7また、西崎芽衣のプロフィール中で紹介した「楢葉町に戻るのではなくいわき市に住むことを決めた」ことへのショックは、現地の方との文通を重ねる中でもたらされたものである。8夜行バスに乗れば朝には現

地に着くといっても、現地の大学生が訪問する頻度とは大きく異なる条件の中で、むしろ一定の距離があることを前提に会える日を互いに心待ちにすることができたのは、手紙というツールが奏功したことによると捉えられるだろう。

無論、手紙以外にも各種のツールが関係性の醸成 には寄与している。足湯という活動メニューも被災 経験や年齢の違いを超えて交流する場づくりには効 果的なツールであるし、何より筆者もまた出会いと 再会の軌跡を記録として写真を撮りかつプリントし て手紙や次回の訪問時などに渡すこと、また京都か らのおみやげを一緒に味わいながら語り合うなどを 重ねてきた。もっとも、こうしたツールへの関心を 手がかりに、距離を超えて心を寄せていった実践に おいて、どのような規範や役割分担の工夫が見いだ せるか、筆者が専門とする社会心理学の一分野であ るグループ・ダイナミックスのいくつかの理論がさ らなる分析視角をもたらしうる。そこで次回は、東 日本大震災の発災から10年を迎えつつある中、こ れまでの取り組みがコロナ禍における三密確保の中 での濃密なコミュニケーションを重ねる上での知恵 を見出すことができるのではないか、との観点か ら、改めてプロジェクト型での問題解決学習のこれ までとこれからのあり方について検討を重ねること としたい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

### 【引用文献】

Carr, E. H. 1961. What Is history?. Curtis Brown. (清水幾太郎訳.(1962). 歴史とは何か. 岩波書店).

山口洋典・河井亨. 2016. サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方. 京都大学高等教育研究 22, 43-54.

山口洋典. 2017. 支援で問われる受援力—学園による支援. 大学時報 372, 62-69.

安田裕子・サトウタツヤ. 2012. TEMでわかる人生の径路一質的研究の新展開. 誠信書房.

安田裕子・サトウタツヤ. 2017. TEM でひろがる社会実装一ライフの充実を支援する. 誠信書房.

## 【注】

- <sup>1</sup> この副題は2021年度向けの案内で確認できる。日本語訳を付すとすれば「感染爆発(後)の視点とその彼方にある好期の挑戦とその解決策」などとなろうか。
- <sup>2</sup> このE.H.カーの著作が「歴史にifはない」の慣用句の原典とする論考がいくつか見当たるものの、本稿では立ち入らない。
- 3 配信は特設ページでの案内もの、YouTubeの「立命館大学校友会」のチャンネルにおいて提供された。
- 4 言うまでも無いかもれしれないが、ここに示したプロフィールは各人に確認済であることを、ここに明記しておきたい。
- 5 減災Pについて、西崎芽衣と森雄一朗は次年度に立命館大学による「教育サポーター[ES: Educational Supporer]」制度により授業運営アシスタントとして継続参画した。なお、森亮太については、最低修了年限を越えたことによりESへの起用基準から外れたものの、卒業年次である2017年まで現場にて受講生と交わることになった。
- 6後方支援スタッフ派遣プログラムについては、山口(2017)に詳しい。
- 7立命館大学校友会報「りつめい」267号の「+Rな人」での森雄一朗のインタビュー記事より。
- 8 このエピソードは、立命災害復興支援室のホームページで紹介されている2016年3月6日公開の特集記事「町民一人ひとりの想いにふれた、楢葉町での聞き取り活動。」で紹介されている。